

## テキスト論と女の解放

— ジェイムズ・ジョイスにおける女の言葉をめぐって —

坂 井 竜太郎

ロラン・バルトやクリステヴァのテキスト論が、ジョイスの言語使用を正当化したことはよく知られている。しかし、テキストに対置される、作品がなぜ問題視され、テキストが賞賛されるのかということは、それほど理解されていない。

テキスト論とは何であり、なぜそれによってジョイスが評価されるのか。こうした問いに対して、明確な答えを出すことができるのは、精神分析学である。精神分析的知見によって、文学と政治社会、その中で生きる人間のあり方が一つに結ばれるからである。

精神分析学でファロス中心主義と呼ばれる父権的秩序<sup>1)</sup>が、われわれの意識を一定の型にはめ込み、思考や言語活動に対して抑圧的な力をふるっている。テキストは、こうした強制的な秩序をその内部において解体する。そして、そこにある多種多様な言説が、現実社会にあるような階層秩序を離れて遊戯、交流するユートピアを創りだそうとするのである。

本論の目的は、精神分析的認識によって、テキスト論とは何か、また、テキストの生成がどのように「女の解放」と結びついているのかということをも明らかにすることである。テキスト論は、セクシュアリティの問題を抜きにしては理解できない。本論は、ジョイスにおけるセクシュアリティの倒錯とテキストの生成がどのように結びついているのかということをも、「女の解放」というテーマを中心に論じるものである。

第一節では、精神分析的観点から解釈されたテキスト論がどのようなものかということが論じられる。第二節では、ジョイスにおける女の言葉と、テキストの生成がどのように結びついているのかということが明らかにされている。第三節では、プラトンの「コーラ」という概念によって、前節までの議論を深め、さらに、それまでの議論と歴史の問題を接続することで、女性的なエクリチュールのもつ力を考察するための新たな視野が開かれ、最後に、全体を総合した結論が述べられている。

## 1 テキスト論と精神分析

テキスト論は、小説の形式をめぐる議論であると一般にはみなされている。それは間違っていない。しかし、そうした理解のみでは、テキスト論の重要性を十分に理解することはできない。

ロラン・バルトが、なぜ1970年代のあの当時、「テキストの快楽」を強調しなければならなかったのか。それをテキスト論の内部のみから説明することは難しい。それを理解するには、精神分析的視点に立ってみる必要がある。「テキストの快楽」を言うことで、バルトは何に抗い、何を守ろうとしたのか。何に反対し、何を解放しようとしたのか。こうした問いにうまく答えることができるのは、精神分析学によってもたらされた洞察なのである。

テキスト論の目論みを精神分析の視点から捉え直して言うと、それは、ファロス中心主義的秩序の解体ということになるだろう。解体という言葉が言い過ぎであるなら、ファロスの秩序の裏をかくこと、あるいは、解きほぐすことと言ってもいい。とにかく、硬直した父権的秩序をずらして享樂すること。凝り固まったパターンを動揺させて、強固な秩序の隙間に、流動する自由な精神を取り戻すこと。これが「テキストの快楽」であり、バルトがいわんとしていたことである。

では、こうした「テキストの快楽」を阻んでいるものは何か。それはエディプスのシナリオに固執する神経症の主体であり、パラノイアの自我であり、イデオロギーであり、われわれの常識を構成する種々さまざまなドクサである。たとえば、バルトは次のように言っている。

われわれの言語活動にはまだヒロイズムが多すぎる。最良の言語活動の中でも——バタイユのことを考えているのだが——、ある種の表現の異常興奮がある。そして、結局は、一種の狡猾なヒロイズムがある。テキストの快楽（テキストの悦楽）は、それとは逆に、戦闘的価値の突然の消滅、作家の蹴爪の一時的な剥離、《心臓》の（勇気の）停止として機能するのだ<sup>2)</sup>。

言語活動における「ヒロイズム」とは、父権的体制に基づく神経症の主体によってなされるものである。「狡猾なヒロイズム」をともなった言説は、その意味体系を完結的で正当なものとするを旨として展開される。そして、その完結した言説によって、主体（作者）の特権性と万能性が保証される。ファロス中心主義的な言語活動とは、こうした目的を背後に隠し持って展開されるのである。

こうした父権的秩序を備えた言説を、バルトはテキストに対して、作品と呼んだ

のである。作品は、どんなに多様な意味や描写にあふれているように見えても、結局、最終的には単一の「意味内容」に還元されてしまう。雑多な言説が数多く散らばっているように見えても、それらの言説を取りまとめて説明する「メタ言語」によって、多様な言説は一つの「真理・教訓」を表象するための手段にされてしまう。すなわち、作品とは閉ざされた意味体系を構築するものなのである。そして、様々な言説が、最終的な唯一の意味内容に奉仕するために存在するという、その閉鎖的な体系性が、父権的、あるいは、ファロスの秩序と言い換えることができるものなのである。

「テキストの快楽」に反対するような言説、われわれの精神を決まりきった強制的なパターンの中に押し込めようとする言説は、バルトが作品と呼ぶものばかりではない。頑ななファロスの秩序を強めるような言説は、いたるところで見つけることができる。メディアが作り上げる神話やイデオロギー、モラリズムの言説、政治の言葉、思想、哲学、宗教に文芸批評。これらの言説は真理を捏造し、不自然を自然化し、紋切り型を反復し、根拠のない思い込みを正当化しようとする。これらの言説に問題があるのは、内容が誤りだからというのではない。内容だけなら正しい言説も多々あるだろう。そうではなく、テキスト論の観点から眺めると、これらの言説はすべて神経症的なのである。これらの言説はすべて、「社会的な善」に奉仕していると主張する。もしくは、人よりも抜きん出た「特権的な知」を握っていると主張する。こうして、これらの言説を主張する人々は、その「善」や「知」によって、社会の中における自己の「存在価値」を証明しようとする、あるいは高めようとするのである。

これらの言説を生産する人々を突き動かしているのは、神経症的な自我の構造であり、「社会的な価値」という観念である。そして、社会という大文字の他者<sup>3)</sup>との関係においてしか自己を確認できないという神経症的症状が、これらの硬直した言説を生み出している元凶なのである。バルトが「狡猾なヒロイズム」といったのは、社会的な善を標榜するこうした言説の裏に、強固な自我への執着が隠されているからである。

これらの凝り固まったファロスの言説に対して、テキストは、できる限り「価値」や「自我」の幻想から遠ざかろうとする。テキストは、価値あるものよりは無価値なものをめざし、自己の有用性を証明しようとするよりは、「役立たず」あるいは「ろくでなし」であろうとする。「役立たず」というのは、「価値」や「意義」といったものから、できるだけ遠ざかり、無価値・無用の饒舌たろうとするからであり、「ろくでなし」というのは、社会通念や常識といったものに従わず、常にそうしたドクサをずらしたり解体したりするような言語活動を行い、体制にとって有害

なるものであろうとするからである。

しかし、そのようなテキストのディコンストラクティブな活動は、必ず脱力とともに行われる。ファロスの言説は、社会的な価値や正義を担っているのだという、力みや緊張感を伴っている。これは体制に抵抗しようとする言説でも同じことである。自らの論理に捉えられ、善と悪を分節するロゴス中心主義的言説には、リラックスするということがないのである。

また、これらの言説は、自己の主観性＝思考にもとづいた論理に従って世界を把握しようとするので、他者や外部を認めることができない。ファロスの主体は、自らの視座から能動的に世界を構成する。そして「これはこうであり、あれはああである」といった判断を下し、これらの判断＝思考によって捉えられた世界を守り抜こうとする。ここには慢心と表裏一体の不安があり、不安な自我に基づく緊張がある。

これに対して、テキストの快楽を感じている主体は、こうした自我のための戦闘や防衛を離れている。テキストの快楽は、他者の言語に触れつづける受動性と忘我のうちにある。ファロスの主体が自己や世界に対する知を固守しようとするのに対して、快楽を感じつつある主体は、そうした知をとり落とした無知、あるいは非知の状態にある。この快楽は、世界を認識するのではなく、世界に触れつづける。それは、思考や概念によって汚されていない世界や他者をありのままに見つづけるということに近い。

テキストの快楽は、世界の見方を変える。それは自我中心的に構成された世界においては、見えないものを見、感じられないものを感じることで、と言ってよい。それは言葉の意味内容よりも、音や響き、色合いや手触りといったもののゆたかさを取り戻すということでもある。テキストの快楽は、意味や論理によって成り立っている世界の隙間に触れ、他者や差異を未知のままに享受しつづけるということなのである。

だから、それは「ユートピア」と呼ばれる。完全な忘我や完全な無意味が存在しないように、影のないテキストというものもない。テキストは作品の論理的構成の隙間にあるといってもいいほどである。論理的な構成からまったく自由な文学作品というものが、この世界に存在することができるだろうか。存在するとしても、それはもはや小説とはいえないようなシロモノになっているだろう。

しかし、そのような文芸を創造しようとした作家がいた。自我の論理からも、イデオロギーやドクサからも自由であり、かつ単一言語システムの構造さえも突き破ってしまうような作品を創造し、出版した。ジェームズ・ジョイスである。

## 2 ジェイムズ・ジョイスにおける女の言葉

以上のようなテキスト論の理解は、ジョイスについて考える上で欠かせない。テキスト論の理解なしに、ジョイスの言語活動の真価を理解することはできないのである。

だが、ジョイスの小説ははじめからテキスト的であったのではない。最初に書かれた『ダブリン市民』は、テキストというより作品と呼んだほうがよい。なぜなら、『ダブリン市民』は単一の意味内容を表象するような、目的論的構成がとられているからである。

『ダブリン市民』が表象する意味内容は、冒頭の短編で少年がつぶやく、'paralysis' という語によって先どりされている。麻痺・無気力・無能・停滞などの意を表すこの語は、作品に登場する人物たちと彼らが置かれた状況をよく表している。『ダブリン市民』の各短編は、それぞれのストーリーの帰結として、この 'paralysis' が指し示されるように構成されている。

しかし、こうした目的論的構成は、『ダブリン市民』の最後を飾る「死者たち」において変化を見せる。

目的論的に構成された言説とは、前節で説明した神経症的な言説のことである。そうした言説は、自己や世界に関する知＝真理を証明したり、承認されたりすることを求める。『ダブリン市民』は、ダブリンの 'paralysis' を示すことを目的として書かれているという点で、神経症的な言説であるということが出来る。「死者たち」における変化とは、こうした神経症的な言説そのものが、対象化され、脱構築される点である。

「死者たち」の主人公、ゲイブリエルは、大学の教員で、何でも知っているかのように思い込んでいる人物である。彼はクリスマス・パーティーに呼ばれてスピーチをすることになっているが、どういったスピーチをしたらいいか、パーティーの間じゅう考えあぐねているような神経質な性格である。そして、文学者でもある彼が、近代主義的な観点から、自国の現状にうんざりしているというのは、ダブリンを否定的に描いてきたジョイス自身の姿と重ねることが出来る。

こうしたゲイブリエルの神経症的な言説を脱構築するのは、三人の女たちである。ゲイブリエルは、この女たちをしかるべき場所に位置付けることができない。

ラカンが、「女」を、言語による秩序である、象徴界に収まりきらない存在として考えた<sup>4)</sup>。ファロスのな主体は、世界を説明可能な表象の体系として管理しようとする。主観の操作によって、世界を有限で語り尽くせるものに作り変えてしまおうとするファロスは、認識不可能な「女なるもの」を別の表象で置き換えて、象徴

界から締め出してしまおうとする。ファロスが世界を管理するためには、世界を確かな意味や量の「集合」に作り変えることができなければならない。ところが、世界は「集合」として一括りにできるようなものではなく、「不確かな多」として常にその外部の領域にはみだしていつてしまうものなのである。世界の「すべて」を包み込むような表象の体系をつくり上げることは不可能である。しかし、「すべて」を知の対象につくり変えうと考えるファロスは、その「不確かな多」である「女」をしめだして、それを別の表象に置き換えて、自分の内側に取り込んでしまおうとする。

したがって、ファロスの言説は、女を管理しようとする。実際「死者たち」以前に書かれた作品においては、女の言説がメタ言語<sup>9)</sup>によって押さえつけられ、制限されていた。母親が突出する「下宿屋」と「母」においては特にそうであった。女の言葉の解放は、作品の目的論的構成を突き崩してしまうからである。

しかし、「死者たち」においては、ファロスのなゲイブリエルの認識に収まりきれない女たちの言葉が解放される。ダブリンの後進性や麻痺を示すことを目的とする、それまでの短編においては、言説の父権的秩序によって、女言葉が管理されてきたのであったが、「死者たち」においては、逆に女言葉によって、ゲイブリエルの父権的主体が脱構築されるのである。

ゲイブリエルは、妻の告白を聞かされるまで、妻を理解しているつもりでいた。言い換えれば、妻を主観の対象として見ていたのである。それは、作中で彼が妻を「何かの象徴」<sup>10)</sup>とみなすところから言うことができる。それは言うまでもなく彼の想像的なマスキュリニティの対応物である。この時点で、ゲイブリエルには他者が存在しない。しかし、ゲイブリエルは、物語の終局で妻を他者として認めることになるのである。

「女たち」の言葉によって、ゲイブリエルのファロスのな自我が解体されるということには、二つの意味があるだろう。

先程、ゲイブリエルの態度を「死者たち」を書く以前のジョイスに重ねたが、その意味を考えると、まず、ゲイブリエルを描くことによって、ジョイスは、今までのアイルランドに対する態度を反省し、改めたということができる<sup>11)</sup>。アイルランドの後進性を苦々しく思うだけでなく、アイルランド的歓待の精神を涵養すべき伝統としてたたえる気にもなったのである。そして、ヨーロッパ近代の方ばかりを向いていた彼が、自国の伝統や文化に改めて向かってみようと思改めたということもできる。

もう一つは、テキスト論的な意味である。「死者たち」以前の目的論的な作品構成、作家のそれまでの独断的なパーステクティブの崩壊は、バルトの言う「作品か

らテキストへ」とジョイスのエクリチュールが変容していく契機となるだろう。

実際、「死者たち」はテキスト的要素の多い作品である。語りの視点は、ゲイブリエルを中心に書かれているが、ゲイブリエルの言説が作品をまとめ上げるような、支配的な言説となることはなく、多様な言説が並置されるような描かれ方がなされている。パーティーの出席者たちの対話は、たいていどこか囁み合っておらず、不理解や不安感を残したまま、どこにもたどり着くことがない。互いに異質な声が、合意や了解に至ることなく、異質なまま置き去りにされている。これはパフチンが、ポリフォニーと呼んだものに近い。そしてこのポリフォニー論が、バルトがテキスト論に移行する契機となったのである<sup>8)</sup>。ゲイブリエルのスピーチと終局のモノローグが、ある程度は支配的言説の役割を果たしているものの、それは様々な他の言説に侵食され、透明なメタ言語とはなりえないものである。

そして、「死者たち」において、ややもするとゲイブリエルの言説以上に重要な役割を持っているのが、語られないままに放置される、三人の女たちの物語である。ゲイブリエルは自らの内で、この三人の女たちを同定することができない。なぜなら、この女たちは、ファロスの知からは、つねに逃れ去るような異質性を持っているからである。ゲイブリエルはこの女たちの言葉の「すべて」を理解することはできない。そして作中においても、女たち言葉の背後にある物語が語られることはない。女たちの言葉は、ゲイブリエルにとっても、また、読者にとっても、未知のままにとどまるのである。こうした、ファロスによる管理を逃れた女の言葉の解放が、テキストの快樂につながるのはい言うまでもないだろう。「死者たち」は、女の言葉を解放することで、ファロスの秩序のくびきを解いて、ジョイスの言語活動を、より自由で柔軟なものにしていくターニング・ポイントになっているのである。

ところが、『若き芸術家の肖像』において、女の言葉は再び影をひそめる。女の言葉が直接作中に登場することは、きわめて少ないのである。このことは、「芸術家」を描く、という作品の目的論的構成と関係がある。しかし、‘Artist’は同時に平凡な‘Young man’として描かれており、この決定不能性が、作品の統一性を打ち砕き、テキストに様々な曖昧さをもたらす事になる。このことは「女の解放」というテーマとも関係がある。これについて、コリン・マッケイブは次のように述べている。

Stephen's fantasy of himself as 'fosterchild' holds out the constant promise of production of a mythical father who will embody the name of Dedalus. This figure of omnipotent father, who will fix an identity on his son, is in conflict with the text's deconstruction of mechanisms of identification and this conflict runs through the text. In so far as the text refuses narrative and the father, it can

investigate the world of mother that lies buried in a patriarchal society, but in so far as the text figures an omnipotent father, in so far as it still tells a story then woman will figure as bagatelles, mere means of exchange between men<sup>9)</sup>.

テキストが、ディーダラスという名前と神話的父との照応関係に固執する限り、女は単なる交換の手段に墮してしまう。しかし、テキストが、そのような父子関係の物語を拒否するならば、父権的秩序によって葬られたかに見える、母親の世界を探求することができる。こうした両義性に関して、マッケイブのとりあえずの結論は、『肖像』は父との同一化を回避し、その回避において母の欲望に口を開かせようとする<sup>10)</sup> というものである。しかしこの結論は、あくまでとりあえずのものにとどまる他はないだろう。

マッケイブがここで、「母の世界」と呼んでいるものは、われわれがテキストと呼んでいるものに等しいと考えてよい。このことはまた後に論じるが、テキストを「母の欲望」と関連づけるのは、マッケイブがバルトよりもむしろ、クリスデヴァの文脈で考えていることによる。

「母の欲望に口を開かせる」といっても、スティーヴンの母親の台詞は間接話法以外で、はほとんど出てこない。マッケイブが「母の世界」と呼ぶものは、ファロスの秩序を生み出すような言説のポジションを拒絶する、「音と運動としての言語」のことなのである。そのような言語は、意味的な世界を構築するよりもむしろ、物質としての「言語そのもの」を読者に経験させる。

「女の欲望」に言葉を与えるという試みももっと大々的に実践されているのは、もちろん『ユリシーズ』においてである。最終章におけるモリーの独白は、ソレルスが言うように<sup>11)</sup>、ブルームとスティーヴンの父子関係の物語を突き崩し、流し去ってしまうようなマトリックスを形成している。そして彼女の不貞は、テキストと神話との照応関係をぶち壊しにし、ブルームの父権を失墜させてしまうのである。

『肖像』におけるスティーヴンとダイダロスとの父子関係は、『ユリシーズ』において、ブルームとの関係に置き直され、さらにブルームの特権性がモリーの存在によって脱構築される。こうしてテキストは、父権的秩序の支配する物語から解放され、多様な言語・言説が循環する遊技場となり、様々なドグマやイデオロギーが脱構築される解放区となることができるのである。

### 3 テキスト論と女の解放

前節では、「女の解放」がテキストの快樂につながっていることを、ジョイスの



テキストを論じながら述べたが、「女の言葉」が「男の世界」に対して強力な否定性を持つことを十分に強調しなかった。ジョイスはモーリーに「私はいつだってイエスという肉体なの」と言わせているが、これは女の否定性に対する恐怖の裏返しかもしれないのである<sup>12)</sup>。

クリステヴァのセミオティックという概念は、男たちが作るシステムに対する、鋭い否定性として考えられ、女の身体的な欲動の次元に結び付けられている。それは意味であるよりも、音や響きやリズムであり、女の身体的欲望の直接的な表現である。男たちがつくるル・サンボリック（象徴界）を突き崩して、欲動を解放する働きが、女の言語活動と詩的言語に備わっているというのである。

しかし、本論ではクリステヴァの議論を仔細に検討することはしない。しかし、テキストを生産するという行為が、作家にとってセクシュアリティの倒錯を伴うだろうということは、指摘しておく必要がある。そうでなければ、ファロスの支配による、この世の秩序に対抗することなどはできないはずだからである。言説における「ヒロイズム」を批判したバルトの議論においても、「テキストの快楽」に至るためには、自己同一的な「男であること」を降りる必要があるだろう。「テキストの快楽」は受動性であり、自己同一性の消失であるからだ。

ラカンの議論では「男は女になることができる」（去勢されることができると）いうことになっている。しかし文学活動においては、去勢されることが問題なのでない。去勢されるということは、能動的な言語活動の停止を意味するからだ。作家は社会によって去勢されるよりはむしろ、社会の論理や秩序に抗って倒錯しなければならないだろう。それはラカンが言う去勢（法の受容）とはまったく異なったものである。

それでも「テキストの快楽」は男性性の休息であり、女性性の回復であるということができる。このことを考えるには、プラトンの「コーラ」という概念を検討する必要がある。

プラトンの「ティマイオス」では、万物生成を論じる場面で以下のように述べられている。

いまの問題としては、三つの種類が考えられなければならない。すなわち、生成するもの、生成がその中で起こるその場所、および生成するものがそれを型どって生まれるその原型である。そこで生成を受容するものを母に、生成の原型を父に、その二つの間のものを子になぞらえるのが適当である。さらにまた、かたどられるものが多様であって、あらゆる多様性を現すものでなければならないとすれば、かたどられるものがその中で生ずるそのものは、外から受

容するあらゆる形を離れているのでなければよく準備されたとはいえない  
……<sup>13)</sup>

万物は、原型である父なるものと、受容器（コーラ）である母なるもの間で生まれる。原型である父が存在したとしても、何ものでもないような母なるコーラがなければ多様なものが生ずることはない。母なるコーラは何ものでもない空無であって、どんなものでも受け入れることができるのである。

論理によって正しいとされる言説は、父なる原型を写しているがゆえに正しいとされる。しかし母なるコーラから見ると、こうした「正しい言説」はどこか、ひっくり返った、倒錯したものに見えてしまう。なぜなら、「正しい言説」は、論理を通すために何ものかを排除し、隠蔽せざるをえないからである。これは、前に述べたファロスの言説と同様のものである。

こうした排他的な「正しい言説」に対して、テキストの生産は何ものも排除しないことを目指して行われる。テキストの生産は「コーラ」の復権を目指して行われるのである。『ユリシーズ』においては、排泄、生殖、自慰行為など、隠蔽すべきものとみなされてきたあらゆる生の領域が、あらわにされ、肯定される。そして、最終的な言説のマトリックスを形づくるのは、けっして「正しい言説」とはなりえないようなモリーの独自の独白なのである。

また、ジェイムズ・フェアフォールは、ジョイスのテクスチュアリティを、歴史の問題と関連づけて論じている<sup>14)</sup>。それは、スティーヴンの“History is a nightmare from which I am trying to awake” (U3.378) というセリフのテキスト論的解釈でもある。

それによると、単線的かつ目的論的な歴史は、ファロス中心主義的な一貫性と結び付けられ、そうした歴史は、アイルランドのコロニアルな状況を転覆不可能な不動のものとして固定化する。それに対して、『ユリシーズ』で実現されているような、流動的で女性的なエクリチュールは、歴史の物語性（虚構性）を明らかにするとともに、その固定性と単一性を脱構築することによって、植民地化された主体に歴史からの自由の可能性を押し開いているのである。

ナショナリティやナショナル・アイデンティティを支える唯一の歴史は、他の歴史の可能性や他者から見られた歴史を排除したことによって成り立ち、植民地支配や民族運動を正当化する。こうした唯一の歴史は、その物語性を隠蔽するとともに、人々を単一の物語に閉じ込め、思想や芸術から自由や創造性を奪おうとするものである。『ユリシーズ』のテキストは、こうした抑圧的な唯一の歴史を覆し、歴史が人々の記憶や伝承によって紡ぎだされる、生成の不確かさやいいかげんさを示

すことで、その深刻さや重圧から人々を解放しようとし、歴史と虚構の境界を消滅させて見せることで、言語による遊びと変容を創造的な実践として機能させようとしているのである。

他の可能性を排除した単一の歴史がファロス中心主義的な主体のあり方に結び付けられるのに対して、創造的な、歴史を脱構築する運動は、固定化を拒み移ろい変化しつつ流れる女性の生産力に帰せられる。『ユリシーズ』の革新性は、秩序転覆的かつ創造的な、女のエクリチュールの全面化によって可能となったのである。

ジョイスにおけるテキストの生成は、女の言葉を解放し、女性的な創造力を回復することで可能となった。女の言葉が持つ否定性が、ファロスの一貫性を脱構築することで、単線的な意味体系によって成り立つ物語が解体され、多種多様な言説が戯れるテキストが解放されたのである。女性性の回復は、凝り固まった男性性からの解放でもあり、ファロスの自我による、論理や概念によって捉えられた狭苦しい世界を解体するということでもある。女性的な力の解放は、さらに、テキストの創造力の解放でもあり、それは決まりきったものの見方や、深刻で重々しい唯一の歴史からの解放でもある。変容しつつ流れる女の言葉の力が、自己同一的な主体や物語を脱構築し、凝結や固定化の罟をすり抜けて享樂することを可能にするのである。

ジョイスのエクリチュールは、こうした女性的な創造力をめいっぱい駆使することで、テキストの可能性を最大限に発揮させることに成功しているのである。

## 注

- 1) ファロスという特権的シニフィアンによって構成される父権の秩序。
- 2) ロラン・バルト『テキストの快樂』沢崎浩平訳、みすず書房、1977年、57頁。
- 3) 個々の他者を超えた普遍的な他者。主体を決定付けるシニフィアンの場。
- 4) 以下の議論は、中沢新一『女は存在しない』せりか書房、1999年による。
- 5) 言語について説明する言語。テキストの多様な言説をまとめ上げて説明し、読みを決定できるような安定した意味の世界を作中に構築する。
- 6) *Dubliners*, with an Introduction and Notes by Terence Brown (Harmondsworth: Penguin, 1992), p. 211.
- 7) リチャード・エルマン『ジョイス伝』宮田恭子訳、みすず書房、1996年にも同様の記述がある。
- 8) 北岡誠司『バフチン』講談社1998年による。
- 9) Colin MacCabe, *James Joyce and The Revolution of The Word* (London: Macmillan Press, 1979), p.66.
- 10) MacCabe, pp.63-64.
- 11) フィリップ・ソレルス『例外の理論』宮林寛訳、せりか書房、1991年、129頁。

- 12) 前掲書、123 頁。  
 13) プラトン『プラトン全集 6』泉他訳、角川書店、1974 年、219 頁。  
 14) James Fairhall, *James Joyce and the question of history* (Cambridge University Press, 1993).

## 主要参考文献

Attrige, Derek. *Joyce Effects On Language, Theory and History*. Cambridge University Press, 2000  
 Benstock, Bernard. ed. *James Joyce: augmented ninth: proceeding of Ninth International James Joyce Symposium, Frankfurt, 1984*. New York: Syracuse University Press, 1988  
 Blades, John. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. Penguin Critical Studies, 1991  
 Fairhall, James. *James Joyce and the question of history*. Cambridge University Press, 1993

Henke, Suzette and Elaine Unkeless. ed. *Women in Joyce*. Hassocks: Harvester, 1982  
 Korg, Jacob. *Language in Morden Literature: Innovation and Experiment*. Hassocks: Harvester, 1979  
 Leonard, Garry M. *Reading Dubliners Again—A Lacanian Perspective*. New York: Syracuse University Press, 1993  
 MacCabe, Colin. *James Joyce and The Revolution of The Word*. London: Macmillan Press, 1979

荒木正純『ホモ・テクステュアリス』（法政大学出版局）1997 年  
 阿部軍治編著『バフチンを考える』（筑波大学学内プロジェクト）1995 年  
 太田 晋『ダブリンの人々を読むためのメモランダム』『ユリイカ』1998 年 7 月号  
 北岡誠司『バフチン』（講談社・現代思想の冒険者たち 10）1998 年  
 コリン・マッケイブ『ジェイムズ・ジョイスと言語革命』加藤幹郎訳（筑摩書房）1991 年  
 坂井竜太郎『古典的リアリズムを超えて』『文学研究論集第 21 号』（筑波大学比較・理論学会）2003 年  
 新宮一成『ラカンの精神分析』（講談社現代新書）1995 年  
 ジャック・ラカン『エクリ』宮本他訳（弘文堂）1972 年  
 ジュリア・クリステヴァ『ポロログ』足立他訳（白水社）1986 年  
 ジュリア・クリステヴァ『詩的言語の革命』原田邦夫訳（勁草書房）1991 年  
 土屋哲編『アルピオンの彼方で』（研究社）1994 年  
 テリー・イーグルトン『表象のアイランド』鈴木聡訳（紀伊国屋書店）1997 年  
 中沢新一『女は存在しない』（せりか書房）1999 年  
 福原泰平『ラカン』（講談社・現代思想の冒険者たち 13）1998 年  
 フィリップ・ソレルス『例外の理論』宮林寛訳（せりか書房）1991 年  
 丸谷才一編『現代作家論 ジェイムズ・ジョイス』（早川書房）1974 年  
 R. シェママ編『精神分析事典』小出他訳（弘文堂）1995 年  
 ロラン・バルト『文学の記号学』花輪光訳（みすず書房）1981 年  
 ロラン・バルト『テキストの快楽』沢崎浩平訳（みすず書房）1977 年